

千手観音菩薩立像

盧遮那仏の左側には、慈悲の菩薩である観音が立っています。観世音としても知られる観音は、従来の姿や11の顔を持つ姿など、様々な方法で描写されますが、この像では、観音はそれよりもさらに超自然的な姿で捉えられています。

千手観音として知られるこの像には、実際には合計 953 本の手があり、そのうち 42 本が大きく、911 本が小さいですが、元々は 1,000 本あったと考えられています。日本には、実際千本の手がある千手観音が 3 つしかないですが、そのうちの一つがこの像です。他の千手観音には 42 本の腕があり、それぞれが 40 種の効能を表しています。この像は 8 世紀にまでさかのぼり、日本最古の木像と考えられています。

この観音像のもう一つの特徴は、その落ち着いた姿勢と明るく力強い表情であり、慈悲の菩薩としてふさわしくある姿が感じられます。

観音の「観」とは、通常目に見えず聞こえないものを見聞きすることができるようになる、神聖な感覚力を指します。実際、観音はしばしばこの力を使って、慈悲をもって地球上のすべての存在を見て、聞いて、必要なときに助けを提供する仏と呼ばれます。

盧遮那仏や他の多くの仏像と同様に、この像も、木心乾漆造を使用して作られました。この技法は、この時代の後の平安時代（794–1185）に、木材が素材として好まれるようになってから、失われてしまいました。